

タイトル：2023 年度 教育セミナー（第 19 回）

日時：2023 年 9 月 21 日（木）～24 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室（303）

「オスマン帝国と非ムスリム：旅行許可証と人口調査の導入から」

上野雅由樹（大阪公立大学）

「視野は広く、テーマは狭く」。これは、講義担当者が大学院生のころに指導教員から学んだ研究の心構えとして心にとどめている言葉である。今回の講義では、これから論文を書くにあたってオリジナリティにどのようにたどりつくのかということに関して、テーマを狭く設定しつつも視野を広く持ち、周辺情報を二次文献や一次史料から積極的に取り入れることにより、様々な刺激にふれて頭を働かせることが有益であるとの考えを述べた上で、こうした考えについて、担当者が現在取り組んでいるテーマの実例を通して説明した。

具体的には、オスマン帝国が 1820 年代に導入した旅行許可証と人口調査に注目した。まず、国家が社会を把握し、管理する傾向を強めていくという側面から近代国家化が論じられるにあたって、移動を管理する文書や人口調査が重要視されてきたことにふれた。そして、先行研究がこれらの導入を主に、1826 年におけるイエニチェリの廃止との関連性を強調する形で論じてきたこと、ただし、キリスト教徒やユダヤ教徒といった非ムスリムにも注目して史料調査を進めると、実際にはギリシア独立戦争によって問題となった彼らの扱いが旅行許可証や人口調査の導入を促したのが分かることを説明した。さらに、こうした制度の導入によって非ムスリムの聖職者層が人口管理の面で帝国の行政に取り込まれていったことが非ムスリム宗派集団の枠組みにも影響を及ぼし、ラテン臣民やカトリック、ユダヤ教徒といった、比較的小規模な集団の長が公認されることに、さらには、20 世紀の研究者が「ミット制」と誤解を招く形で名づけた、帝国と非ムスリムの関係性が形づくられることにつながっていったことを論じた。

これまでの研究は、旅行許可証や人口調査、ギリシア独立戦争、さらには小規模な非ムスリム集団の長の公認といった「狭いテーマ」を、同時期の他の事象を視野に入れずに個々別々に扱ってきた。そうした「視野の狭さ」は、結果としてこれらの事象の関連性を見落とすばかりか、「狭いテーマ」として扱った事象が持った意味を十全に理解することを妨げてきた。研究の蓄積が増大し、テーマの細分化が進むなかで、研究者は守備範囲を限定しがちである。たしかに、まずは自分の扱う対象と関わりの深いところから足固めをすることが重要ではあるのだが、ひとつのところにとどま

ってかりそめの安心を得ようとするのではなく、不安でもそこから少しずつ踏み出していくことが有益なのであり、また新たな楽しさにつながるということを最後に確認した。